

毎日の保育問題 (三)

上

澤

謙

一一

五 どこにお辨當を忘れたか

入口でのごた／＼は、波のひくやうにひいて、園児たちはみな歸つてしまつた。建物の中は急にひつそりして、同時に先生達も何ごなくホツとする。

途端にひごりの子供がかけ込んできた。小さい組の女の子Mちゃんである。緊張した顔さいふよりも、こらえにこらえた顔である。何をこらえたかさいへば、申すまでもない、泣くのをこらえたのである。さうして一生懸命走つて戻つてきたのである。

入口にちやうき先生が二人立つてゐた。

『Mちゃん、さうしたの』と、殆ど同時に聲をかけた。

『お辨當箱……忘れたの……』さいふ。

『お辨當箱？お辨當箱なんかなかつたわよ』と、一人の先生がいふ。さうして『誰かが間違つて持つていつたんでせ

う』と、いひ添へる。

するさもう一人の先生がいふ。

『まあ、Mちゃんひごりでお辨當箱取りに歸つてきたの。えらいわねえ』

さうするさ、

Mちゃんの顔の切迫した緊張はやや緩んでコツクリする。

『待つてよ、いま、先生がさがしてきてあげるからね』

と、言葉をつづける。

さてこの二人の言葉を比較して見る。

前の先生がいつたこゝは、理屈に合つてゐる。さつきみんなの歸りがけに、いつものやうにお辨當を置く棚を見た時、一つも残つてゐなかつたのである。だから忘れたこゝは思はれぬ。それなら誰か前の人を持つていつたこゝは断定するより外にない。然し園児の中には故意に悪意を構へて持つ

てゆく者はなからう。さういふれば間違つて持つていつたを断定するより外にない。正にこの言葉は理窟に合つてゐるのである。

けれども理窟に合つてゐるだけそれだけ、何ぞ冷かであることよ。『お辨當箱?』さういふ劈頭の言葉がもう反問的である。反問的さういふ底には「なぜそんなことを聞くの、お辨當箱はめい／＼持つてゆく筈ではないの」を咎める氣持がある。つづく第二語『お辨當箱なんかなかつたわよ』さういふのは、明かに決定的な言葉である。その裏にはキメツケル氣持がある。先生は咎めたりキメツケたりするつもりでいふのではないが、さういふ氣持が潜んでゐるので、自然に言葉の音や調子にそれが含まれる。その氣持は言葉と共に、子供の心にぶつかると。「こらえてこらえて、一生懸命になつて戻つてきたをさな兒」に取つて、それがいかにきつい、きびしい、いかついものであるかはいふまでもない。

つづく第三語『誰かが間違つて持つていつたんでせう』は、致命的な言葉である。これでブツリ頼みの綱は切れてしまふ。何ぞなれば、「こらえてひきり再び幼稚園まで戻つて來させたもの」は、そこに忘れたものがあるにちがひないさういふ期待だからである。然も『誰か持つていつたんでせう』と、權威ある先生がいふに至つては、期待は粉碎されざるを得ないからである。この言葉は、かくて、先

生がさう思つていはなくても、結果に於ては明かに「相手を突放す」すげない言葉になるのである。

かくてMちゃんの忍耐も、努力も、希望も悉く消える、ワーツ泣き出すのが必然の経過であらねばならぬ。

ところが泣かなかつた。泣かないばかりでなく、ジツミ入口に立つてゐる。なぜか?

全くもう一人の先生のためである。後の先生は何よりも先づ、こらえてひきりで戻つてきた本人の可憐な努力を見、その精神的價値を見た。だから第一語はこれに對する認識と稱讚とを表はしたものである。これで子供の心は先づ一種の満足と、さうして強い獎勵を與へられる。第二語の『先生がさがしてきてあげるからね』は「あるにちがひない」を思つて來た期待に、大きな望みを加へる。權威ある先生が、期待を受取つて、それを實行に移してくれるからである。だから、ジツミ立つて、入口に待つてゐられるのである。

後の先生も、前の先生と同じく、さつきお辨當箱を見て、一つも残つてゐないことを知つてゐるのである。けれどもこの先生の口からは、所謂理窟に合つた言葉は出なかつたのである。なぜか? この先生は「物の有無さういふ形式を見るよりも「可憐な努力と期待」さういふ心を見たからである。だから形式に副つた理窟に合つた言葉で應酬するに堪へな

かつたのである。もしさうしたら、その努力を期待は全く無になる。否、その努力を期待のためにかへつて悲しみを失望を大きくするやうな逆な結果になるだらう。それに堪へられなかつたのである。それで自然にさがしてやる氣になつたのである、子供の心に直下に同情同感して立上がつた先生のその時の心持は「さうせないけさ一應さがして見てやらう」「さういふやうな、氣休め的な政略的なものではない。もつと強い熱のあるものである。」

「さういふ心持である。」

それでお臺所、お部屋、遊戯室を見て廻つたが——ない。先生はがつかりした。がつかりしたさういふよりも子供の心を想つて痛はしかつた。けれども仕方がない。再び入口へ来て「ね、さうしたんでせう、さういふにも……さういひ出した時である。」

ふさわきを見た子供は、俄に大聲を掲げた。

『あつ、先生、ここにあつた!』

それは下駄箱の中である。Mちゃんの履物を入れる小さな區劃の中である。そこにあのバスケットが黙然としてゐたのである。

『まあ』『まあ』

二人の先生は殆ど同時にいつた。さうして思はず笑つ

た。それは見つけ出したのを喜ぶ笑ひでもあり、事柄が餘りにだしぬけで、又餘りに身近だつたので、滑稽感を催した笑ひでもあつた。

Mちゃんはニコ／＼して、バスケットを取つた。

『そんなところにあつたぢやないの』『さ、前の先生がいふ。』

『まあ、あつてよかつたわね』『さ、後の先生がいふ。』

ここで又二人の言葉を比較して見る。

前者の言葉の奥には非難の氣持がただよび、後者の言葉の裏には喜ぶ氣持がみなぎる。彼は離れて現はれた形式を見、これは即して心の中を見る。

子供はバスケットをプラン／＼させて、いそ／＼と歸つてゆく。

六 イージゴインケの臆病者

五、六人の男の子が棒きれを持出した。

『僕、大將だよ』『僕、部隊長』『僕は曹長だ』

めい／＼自分で任命した自分の役名を披露する。

『これ、日本刀』『これは鐵砲』『これは機關銃』

一本の棒きれは、いろ／＼な武器になる。將に戦ひごつこが始まらうとする。

その時である。先生の顔が窓から出て、聲がかかつた。

『ちよつと! そんなものを持つてふり廻してはあぶないでせう。ほら、いつか棒を持つて遊んで、たくさんお友だ』

ちが泣いたでせう。それはやめるの、ほかのものでなさい』先生の頭の中には、しばらく前の或る時のことが思ひ出されてゐた。

それは園の庭へ植木屋がはいつて、木の枝をおろした時のことである。その枝をめいめいが持出してふり廻して、全庭が喧噪、混亂、號泣の巷々化した。それで先生はみんなにそれを持つのを禁じたことがある。それ以來、何さなく「棒きれを持つてはあぶない、やめさせなければならぬ」といふ觀念が、規則のやうに頭の中にたたみ込まれたのである。それで、今、その時と同じやうな有様を見るに、その「規則」が出てきたわけなのである。

聲をかけられた五六人は顔を見合はせた。しばらくそのままであるが、やがて一人が『やめよう』といつて、棒きれを捨てるに、みなそれに倣つた。

『ああ、さうく、よく分かつたわね』と、先生がいつた。けれども子供達は、そのままその遊びをやめてしまふのは、いかにも心残りがしたのであらう。さつきの一人が、右手を出していつた。

『これでいいよ、これで戦はう』

その手は固く握られて、人さし指が出来るだけ長く伸ばされてゐた。その指を棒の代りにしようといふのである。

それを見た先生はハツミした。

「ああ、それ程棒がほしいのか。いかにも武器のない戦争はない以上、何か持つものがない戦争ごつこはあり得ないだらう。棒きれを持たずに戦ごつこをせよといふのは、武器を持たずに戦へといふの選ぶごころがないといへう。そんな必要な棒でも、先生にせめられれば、思ひきつて捨てるのである。それ程までに、先生のいひつけに服従してくれるのか。けれども必要な欲求はやむべくもない。その服従ごその欲求を調和するために、自分の指を代りに使ふといふごころまで考へ出したのか。そのいじらしい心根はさうだ」

その椅子に腰をおろした先生は、尙も考へた。

「恐ろしいのは、活きた生活を固定した規則で律しようといふ心である。殊に自由潑刺たるべき幼児の生活にそれを課する心である。然も人はさもすれば規則にたよる。最もはつきりしてゐて、従て最も簡單だからである。殊に團體生活を處理する時、それに泥み易い。けれども國民大衆を牽るる場合ならいざ知らず、をさな兒を保育するのに、規則を先に立てるごころは、うっかりするに、生けるものを殺すごころになる。「棒はやめよう」といつた或る場合の處置を規則化して、あらゆる場合をそれで束縛しようといふ恐ろしい態度に、いつか知らず、自分はなつてゐたのではないか」

考へは尙つづく。

「もうだ、戦争でここに棒きれを持たせよ。さめるのは、その棒が「ごつごつ」以上の又は以外の危険な目的に用ゐられる場合に、なさるべきではないか。それで決して遅くないではないか。規則主義者は頑固屋だ、イージーゴーイングの徒だ、臆病者だ」

ワーツミいふ聲が窓の外に起つた。見るまゝ、さつきの五人が追ひつ追はれつしてゐるのである。そこで取つてきたか、手に手に細い／＼短かい／＼小枝を持つてゐる。やはり指では満足できなかったのだ。けれども先生にさめられたことはまだ忘れられない。それでつつしみ深くも梢の小枝の端くれにしたのである。

「何さいふいじらしさ。御身等は、こんな不合理な禁令を出す私に、こんなに従ふ心を持つてゐるのか、濟まない、濟まない」

先生はその子供達一人々に詫びたいやうな、殊にあのこれでもいいよ、これで戦はうよ、指を出した子供に對しては、その前へ出てあやまりたいやうな氣持になつた。

それは午前の外遊びのことであつたが、午後の外遊びの時に、又ワーツワーツミいふ叫びが起つた。

「やり出したな」と思つた先生が、外を見るまゝ、手に手にあの「やめて」さいはれた棒きれを持つてゐる。到底細い短

かい枝では満足できなかった彼等は、遂に——さいふよりは、自然に棒きれまで發展しなければやまなかつたのである。同時に自然に禁令は忘れられたのである。同時に又彼等は我を忘れたのである。さうして全心全身を傾けて、戦ごつこに没入してゐるのである。あの赤い顔を見よ、輝く目を見よ、動く手足を見よ。

先生はホツミ溜息をついた。胸をふさいでゐたかたまりが取れ、肩にのしかかつてゐた重石がおりたやうな氣持である。

ふぎ、何年か前に觀た映畫『制服の處女』の最後の場面が目の前に浮かんできた。規則づくめで固まつた女學校長のおばあさんが、若い生命の躍動を支えきれないで、精神的に敗北し、うな垂れた顔に手を當てて、足取り重く、自分の部屋に歸つてゆくところである。

「あのおばあさん校長だつて、規則づくめのかたまりにならうましてなつたのではない。知らず識らずのうちにさうなつてしまつたのだ。だから、自分がさうなつたことに氣づかないのだ。他人事ではない、うつかりしてゐるまゝ、それは自分のことになるのだ」

先生は目を閉じた。我まわが衷を見廻すやうに。ワーツミ子供達の朗かな喊聲が、その窓邊を掠めて過ぎた。